

# 展覧会「大博覧会展―博覧会を楽しむ20のエピソード」と京都工芸繊維大学

美術工芸資料館館長 並木誠士

美術工芸資料館では2024年6月24日(月)―8月10日(土)の会期で、「大博覧会展―博覧会を楽しむ20のエピソード」を尼崎市立歴史博物館との共催で開催しています。

近代社会において博覧会は、啓蒙や知識の伝播、権力の誇示、産業の振興などさまざまな役割を果たしてきました。19世紀末にイギリスではじめて万国博覧会は、その後、世界各地の主要都市で開催されるようになり、日本も明治6年(1873)のウィーン万博からほぼすべての万国博覧会に参加しています。国内でも、明治4年に、日本で最初の博覧会が京都で開催され、明治10年には第1回内国勸業博覧会が開催されました。19世紀末から20世紀前半は「博覧会の時代」といってもよいほどに、各地でさまざまな博覧会が開催されています。また、博覧会の告知のためにポスターが使用されるのは19世紀末からと考えられますが、それ以前にも、博覧会を宣伝したり、会場の様子を伝えたりする印刷物や写真は数多くつくられています。

この展覧会では、博覧会関係資料を数多く収蔵している尼崎市立歴史博物館のご協力のもと、日本で最初の京都博覧会から「幻の万博」とよばれる昭和15年(1940)の日本万国博覧会までのポスターや関連資料を展示するとともに、博覧会を楽しむための20のエピソードを紹介いたします。ここでは、そのなかでも本学に関係するエピソードのいくつかをご紹介しますと思います。

都市主催」の文字を入れることが条件でした。また、色数は「十色前後」としています。このときの審査員の中には、京都高等工芸学校教員の都島英喜(1873・1943)、本野精吾(1882・1944)、霜島正三郎(1884・1982)が含まれていました。この時期に京都高等工芸学校がポスターデザインのひとつの拠点であったことを示しています。美術工芸資料館では、この懸賞募集の1等と3等(図2)のポスターを収蔵しており、尼崎市立歴史博物館が2等のポスターを所蔵しています。今回の展示ではそのときの1等から3等までを揃って展示することができました。

1933(昭和8)年にシカゴ市制100周年を記念して開催されたシカゴ万博には、京都高等工芸学校から陶磁器作品が出品されました。一对の《柴付牡丹桃花瓶》(図3)です。「京都高等工芸



図1 1907年 三越呉服店

京都工芸繊維大学の前身校のひとつである京都高等工芸学校の初代校長中澤岩太(1858・1943)は、ドイツに留学をした化学者でセメントや硝子などを研究する材料化学が専門でした。留学から帰国して東京帝国大学の教授になりますが、この中澤は材料化学のエキスパートとして、明治20年(1887)、帰国後すぐに開催された東京府工芸品共進会(小規模な博覧会)の審査員となります。ここで中澤は、陶磁器や玻璃器の審査をつとめます。この時期の陶磁器は、美術的な側面よりも、化学的な側面、つまり釉薬の改良などが博覧会で注目されていたのです。その後、全国規模の内国勸業博覧会の第3回(東京・上野、明治23年)、第4回(京都・岡崎、明治28年)の化学部門の審査をつとめ、第5回内国勸業博覧会(大阪・天王寺、明治36年)では第5部化学工業の審査部長をつとめています。その中澤は、明治33年に渡欧して、パリで開催された万国博覧会を見学し、ヨーロッパの実業学校を視察しています。このパリ万博の様子を撮影したガラススライドが美術工芸資料館には所蔵されています。おそらく中澤が購入を指示したものでしょう。また、このパリ万博に向かう船中で、洋画家の小山正太郎が同船した中澤岩太のために描いた《パリ画帖》という水彩画の美しい作品も収蔵しており、展覧会に出品しています。

内国勸業博覧会は、第6回目の開催を政府が検討していましたが、日露戦争による経済状況の悪化などにより見送られました。そこで、代わりに東京市が開催したのが、明治40年の東京勸業博覧会です。学校陶磁器科教室」の作成と記録されている、高さが65cmほどもある堂々とした大型の花瓶です。日本では明治6年にはじめて参加したウィーン万博以来、大型の陶磁器の出品は多かったのですが、この花瓶一对の場合、おそらく教育機関からの出品ということが重要だったのではないかと思われます。このとき博覧会には《柴付水盤》も一緒に出品されました。

世界で最初の万国博覧会は1851年にロンドンで開催されました。万国博覧会は、以後、ヨーロッパ、アメリカを中心に世界各地の大都市でつぎつぎと開催されて、新技術の披露やさまざまな美術工芸の陳列に加えて、開催国の国力を示す重要な場となっていました。欧米各国に肩を並べたい日本でも当然万国博覧会の開催を望む声が高まっていました。そして、昭和15年(1940)、紀元2600年

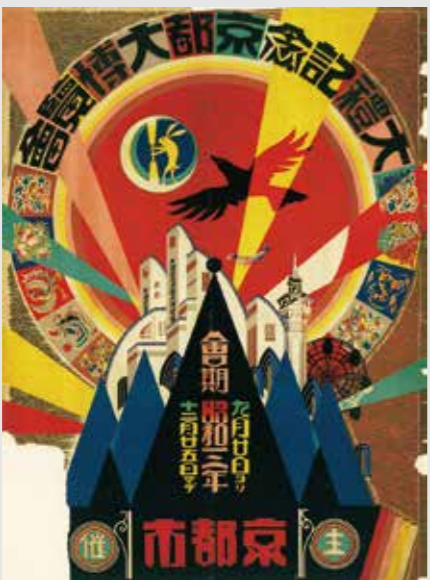


図2 1928年 大札記念京都大博覧会ポスター

「文明を刺激の袋の底に飾り寄せると博覧会になる」とは、東京勸業博覧会を舞台のひとつに設定した夏目漱石の『虞美人草』の一節です。1900年のパリ万博をも経験した漱石は博覧会を大いなる刺激の場と考えていました。そして、さらに続けて「博覧会を鈍き夜の砂に漉せば燦たるイルミネーションになる」と書いています。東京勸業博覧会のイルミネーションは、その華やかさが評判でした。そして、この東京勸業博覧会の絵画部門で1等を受賞した岡田三郎助(1869・1939)による洋画《紫の調(某夫人の肖像)》(アーチゾン美術館)をもとに三越呉服店が制作したのが、わが国で最初のポスターといわれる《むらさきしらべ》(図1)で、これも美術工芸資料館の収蔵品に含まれています。原画は当時の三越の重役であった高橋義雄の夫人をモデルとしたもので、これを三越呉服店が多色石版のポスターとして世に出しました。ここでは、あくまでも洋画家による「絵画」がアイキャッチの役割を果たしていて、それに文字情報を加えるものでした。

昭和天皇の即位を記念した大札記念京都大博覧会は、昭和3年(1928)9月20日から12月25日の会期で開催され、318万人の入場者を集めました。博覧会の告知を目的としたポスターの懸賞募集が昭和2年11月から昭和3年1月20日までの応募期間で実施され、2月に審査結果の発表がおこなわれました。「意匠」として「大札記念の意味を表徴すること」があげられ、「大札記念京都大博覧会」(会期、昭和三年九月二十日より同年十二月二十五日まで)「京を期して東京市での開催が決まりました。告知のためのポスターがつくられましたが、そのなかでもっとも広く知られているのが、3等1席の中山文孝による《赤色地富嶽金鷲図》です。中央に聳える富士山と神武天皇東征の故事を踏まえた金の鷲が、紀元2600年を奉祝しています。しかし、この万博は、日中戦争の激化などを理由として取りやめになります。同年に開催が決まっていた東京オリンピックもまた幻になりました。今回は日の目をみなかった《赤色地富嶽金鷲図》も展示しています。

以上のように、日本の近代化に大きく貢献した国内外の博覧会に、京都高校工芸学校やその教員たちが大きく関わっていたことがわかります。今回の展覧会では、いま注目が集まっている博覧会に、本学ならではの視点から迫ってみたいと思っています。



図3 1933年 シカゴ万博出品京都高等工芸学校作品